

研究ノート

志願者数解析による岡山県立大学における入試制度の考察

佐竹恭介（岡山県立大学アドミッション・高大連携センター）

喜村仁詞（岡山県立大学アドミッション・高大連携センター）

横田英之（岡山県立大学教学課入試班）

平田英俊（岡山県立大学教学課）

伊東秀之（岡山県立大学アドミッション・高大連携センター）

要旨：少子化が社会問題となる昨今、学生募集は大学の死活を左右する重要課題である。志願者が定員に満たないという状況に陥る大学も見られるなか、有効な選抜が期待できる入試実施の可否は志願者の数および質に依存するところが大きい。本稿では岡山県立大学の令和4年度（2022年度）入試における志願者数の解析から入試制度や入試科目が受験生の志願動向に与える影響を考察した。出身校の実情も把握しやすい県内志願者に重点を置き、その志願者数から入試の現状を分析し、今後の学生募集の課題を探る。

キーワード： 岡山県立大学 一般選抜 特別入試 入試改革 志願者数

1. はじめに

教育の場であるとともに研究の場であるという大学の二面的機能を維持するために、優秀な学生をより多く入学させることは極めて重要な課題である。大学教員の視点から入学試験が備えるべき条件は「大学での教育に応える人材の選抜」かつ「4年後には共同研究者となる人材の選抜」等である。ところが、現在の社会状況は18歳人口の漸減傾向¹が続き、今後においても好転する見込みはない。戦後における18歳人口は昭和41年（1966年）の249万人がピークであったが、令和4年（2022年）には半分以上の112万人に減少している。この間大学進学率は昭和41年度には15%であったものが令和4年には55%と増加している。18歳人口の減少が進学率の増加により補

償され、受験生人口が減少するという状況への対策を先送りしてきた感がある。しかし、近年では進学率の上昇も頭打ちとなり、進学希望者の全員が大学に入学できる大学全入時代²が現実となった。この減少は地方都市で顕著であるため、地方大学では志願者確保のためにこれまで経験しなかった努力を強いられることになり、大学の存続をかけた入学者の獲得を競う状況が目前に迫っている³。本稿では令和4年（2022年）度入試の岡山県立大学（以下本学）における志願者数を分析し、受験生の志願行動と入試制度の関係を明らかにしようと試みたものである。志願者数は入試制度が受験生に受け入れられているかどうかのバロメーターであり、今後の入試において志願者増を考慮するための有効な指標になる。

本学の入試制度⁴を概観しておく。本学には保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部が設置され、入学定員は370名という比較的小規模な公立複合大学である。入試における募集単位は学科毎であり、いわゆるくくり入試的な選抜は行っていない。保健福祉学部は看護、栄養、現代福祉、子ども学科の4学科、情報工学部は情報通信工、情報システム工、人間情報工学科の3学科、デザイン学部はビジュアルデザイン、工業デザイン、建築学科の3学科、これらの10募集単位が表1に示した特別入試(総合型選抜、学校推薦型選抜)と一般選抜(前期、中期、後期)を実施している。学校推薦型選抜は他大学とは異なり、県内枠であり、原則として岡山県内高校の卒業見込者に限り出願資格を与え、全募集単位で実施している。そのほか帰国生入試、私費外国人留学生入試を実施しているが、いずれも若干人の募集であり入学定員の内数となっている。

表1 岡山県立大学の入試制度

選抜名	実施学部または学科名
一般選抜	前期 全学部全学科
	中期 情報工学部全学科
	後期 保健福祉学部全学科
総合型選抜	現代福祉学科 デザイン学部全学科
学校推薦型選抜	全学部全学科
帰国生入試	全学部全学科
私費外国人留学生入試	全学部全学科

2. 全国からの志願状況

本学の令和4年度(2022年度)入試における志願者数⁵は2630名であり、志願者の出身地域は表2に示した上位10県の志願状況から概観できる。上位10県の志願者数合計は本学志願者数の78%を占める。これ

により志願者の地域性は次のように読み取ることができる。岡山県内の志願者数は842名であり、全志願者数の32%にあたる。

表2 府県別出願者数(上位10県)

順位	府県名	出願者数
1	岡山	842
2	兵庫	346
3	広島	254
4	大阪	155
5	愛媛	123
6	香川	117
7	京都	62
8	徳島	59
8	福岡	59
10	山口	55

岡山県の東西隣接県である兵庫、広島県が岡山県に続く主要な地域である。南北隣接県である愛媛、香川県および表2のランク外となっている島根(12位)、鳥取県(13位)、との比較では南隣接県からの志願者数が多く、約3倍の開きがあった。双方の人口差を考慮しても、その差は大きく、北隣接県での本学への認知が充分ではない。また、山陽新幹線の東端および西端に位置する大阪府と福岡県は、本学までのアクセスに関しては大きな差が無いが、志願者数においては2.5倍と大きな開きがあり、人口比を超えている。九州地区の受験生は九州内志願を行う傾向が強く、県外に進学する場合も広島市までは親近感のある地域として捉えている。九州地区での認知度向上は心理的な遠距離感を払拭する方策が必要となる。

各選抜における学部別志願状況を示した(表3)。特別入試である総合型選抜への志願者数は124名であり志願倍率は8.3倍と高倍率であった。一方、県内枠である学校推

表3 各選抜における学部別志願者数

学部	特別入試		一般選抜			帰国生
	総合型	学校推薦型	前期	中期	後期	
保健福祉学部	33	114	214		232	2
情報工学部		82	147	1528		1
デザイン学部	91	45	140			1

薦型選抜への志願倍率は 2.3 倍と低いものであったが、高校あたりの推薦人数に制限が設けられている学科が多いため、希望者全員が出願可能ではなく高校内選考により志願者数が抑制されている。高校からは推薦人数制限の撤廃を希望する声がある。また、一般選抜中期および後期日程では志願倍率はそれぞれ 25.0 および 12.2 倍と高いがこの高倍率は中期・後期日程の宿命であり、実質倍率はそれぞれ 13.0 および 6.1 倍とであった。中期・後期まで頑張ろうとする受験生が少なくないことを示している。

3. 県内からの志願状況

岡山県内に設置されている高校は公立 68 校、私立 23 校である。このうち令和 4 年（2022 年）度は公立高校 40 校、私立高校 14 校で合わせて 54 校から出願があった。県内志願者数は全志願者数の約 30% であることは既に述べた。各県に国立大学が設置されている現状で、地方公立大学は、競合する地元国立大学よりもさらにきめ細かく地元高校との信頼関係を構築し、地元

高校に支持される高大接続を行うことが求められる。地方創生および活性化をも考慮して、高大接続と高大連携をリンクした選抜等の工夫も重要な課題である。

このような現状を踏まえて本学の県外、県内志願者数を表 4 にまとめた。県内枠である推薦以外では、志願者の県内率が大きいのは総合型（56%）および後期日程（43%）であった。これらの選抜は県内受験生が必要としている選抜であると考えて良い。とりわけ、一般選抜後期日程については地元国立大学が募集停止を公表したこともあり、必要とされる度合いがさらに高まると予想される。一方、情報工学部 3 学科が実施する中期日程では県内率（17%）が低く、広い地域の受験生に利用されているのが現状である。

3-1. 出身高校のグループ化

志願者の出身高校の属性を明確化するために、普通科や理数科等で教育している高校を国公立大学への進学者数を基にグループ A から D に分類した。また、専門・総合教育を実施する高校をグループ S とした

表4 各選抜における県内、県外志願者数と県内率

	総合型	推薦型	一般前期	一般中期	一般後期
県外志願者	54	2	333	1291	133
県内志願者	70	239	168	267	99
県内率 (%)	56	99	34	17	43

(表5)。大学進学者数は規模の大きい高校と小さい高校間においては公平・厳密に比べられる数値ではないが、高校のランキングが本意ではないので、各高校が公表している数値⁶を加工することなく用いた。

表5 県内志願者出身高校のグループ化

グループ	国公立大学合格者数	学校数
A	150名以上	9
B	50-149名	12
C	10-49名	9
D	9名以下及び未公表	14
S	専門・総合教育実施校	10

A、Bの高校は国公立大学に50名以上の合格者を出す進学校であり、そこで学ぶ生徒の進学意識は高い。とりわけA高校からの志願者数の増加は本学への信頼および評価を示す指標となり、重要な因子である。専門教育を受けるグループSの高校においても進学率の向上とともに大学を目指す生徒が多くなっているが、カリキュラム編成が普通科等と異なるため共通テストが課される一般選抜での受験は不利である。共通テストを課さない選抜において専門高校生枠を設定し生徒の進学意欲に応える大学も多い。本学の学校推薦型選抜においても専門教育を受けた志願者への配慮を行っている。

3-2. グループA-S高校の志願状況

県内志願者842名のグループ別志願者数

を表6に示した。本学志願者の大部分はA、Bに属する受験生(県内志願者の78%)である。さらに、A、Bに属する受験生は共通テストを課さない総合型(A:3.1%,B:7.3%)および学校推薦型(A:15.3%,B:32.6%)への出願の割合は小さいが、C、DおよびSでは総合型(C:10.8%,D:16.7%,S:40.5%)および学校推薦型(C:38.6%,D:41.9%,S:54.1%)への出願率が順次高くなる。また、Aに属する受験生が一般選抜中期、後期に多く出願している現状も把握できる。A、Bの高校においては面接による選抜を敬遠し、共通テストで測られる基礎学力で選抜を受けさせるという進路指導の傾向が反映された結果である。

3-3. グループA-S高校の募集単位毎の志願状況

本学が実施する選抜の中で出願希望者が制限なく志願でき、かつ全10募集単位全てが実施する選抜は一般選抜前期日程に限られる。また、多くの受験生にとって一般選抜前期日程は第一志望校に位置付けられている。本稿ではこの選抜に着目し、募集単位毎に異なる共通テストの利用科目および個別試験科目が志願行動に与える影響の有無を考察した。各募集単位における共通テストの利用科目数と個別試験は次の通りである。

表6 グループごとの志願者数と各選抜への志願状況

グループ	志願者数	総合型	学校 推薦型	一般選抜		
				前期	中期	後期
A	320	10	49	66	136	59
B	328	24	107	71	100	16
C	83	9	32	16	23	3
D	74	12	31	14	8	9
S	37	15	20	1	0	1

看護学科
 5 教科 5 または 6 科目 集団面接
 栄養学科
 5 教科 7 または 8 科目 理科
 現代福祉学科
 3 教科 3 または 4 科目 個人面接
 子ども学科
 3 教科 3 または 4 科目 個人面接
 情報工学部 3 学科
 4 教科 6 科目 数学
 ビジュアルデザイン学科
 4 教科 4 または 5 科目 実技
 工芸工業デザイン学科
 3 教科 3 または 4 科目 実技
 建築学科
 4 教科 5 または 6 科目 実技

一般選抜前期日程において各募集単位の志願者数をグループ別にまとめた(表 7)。加えて表の下部には募集定員、県内志願者数と募集定員の比率である県内志願倍率、A からの志願者数の比率をグループ A 率(%)として示した。最下行には参考のた

め志願倍率を併せて示した。一般選抜前期日程では募集定員 169 名に対して 501 名の志願者があり全学の志願倍率は 3.0 であった。効果的な選抜を実施するための志願倍率は経験的に 3 倍程度以上が望ましいとされており、志願倍率 2 倍を下回った募集単位はその状況が複数年続かないような対策を講ずる必要がある。

県内志願者数 168 名は全志願者の 33% を占める。多くの募集単位で県内志願者数は募集定員を超えている(県内志願倍率 \geq 1)が、デザイン学部 3 学科ではこの値が小さくなっており、他学科に比べて県内出願者が少ないことを示した。学科間で共通テストの利用科目数の違い、個別試験で筆記試験を課す等の違いがあるが、保健福祉学部 4 学科、情報工学部 3 学科の比較では志願者数および県内志願率に試験科目との顕著な相関は認められなかった。デザイン学部では個別試験で課している実技が県内志願倍率の減少に寄与していると思われる。県内志願者 168 名は A から 66 名(39%)、

表 7 グループ A~S 志願者の各募集単位への一般選抜前期日程志願状況

グループ	志願者	募集単位*										
		看護	栄養	現代	子ども	通信	シス	人間	ビジ	工芸	建築	
A	66	20	14	10	5	2	5	4	2	3	1	
B	71	11	4	6	3	9	12	12	6	5	3	
C	16	2	2	0	1	3	2	2	1	2	1	
D	14	1	2	2	2	3	1	0	1	1	1	
S	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
計	168	38	22	19	11	17	20	18	10	11	6	
募集定員	169	20	25	17	13	14	14	12	18	18	18	
県内志願倍率	1.0	1.7	0.9	1.1	0.8	1.2	1.4	1.5	0.6	0.6	0.3	
グループ A 率	39	53	53	53	45	14	25	22	20	27	17	
志願倍率	3.0	3.2	3.5	2.3	1.8	3.1	4.6	3.3	2.9	2.1	2.8	

* 表内募集単位名：現代=現代福祉、子ども=子ども、通信=情報通信工、シス=情報システム工、人間=人間情報工、ビジ=ビジュアルデザイン、工芸=工芸工業デザイン

B から 71 名 (42%)、C から 16 名 (10%)、D から 14 名 (8%) であった。A、B からの志願者が 80%を超えている。それぞれの募集単位でグループ A 率を見ると保健福祉学部 4 学科は高率で情報工学およびデザイン学部で低い数値であった。後者 2 学部においては B からの志願者が主になっている。情報工学部では中期日程では A からの志願者が多いことから (表 6)、第二志望校としての出願が多いと思われる。地元国立大学工学部と学びの環境や教育・研究での差異および本学の特徴を明確に提示し、本学を第一志望とする志願者を増やすことが必要である。一方、前期日程のみを実施するデザイン学部は県内の A からの志願者数が一般選抜においては少なく、これを改善する方策を検討することが望まれる。

4. まとめ

入試において重要なことは志願者数を確保するという大前提に加えて、その入試が適切に機能しているかということが重要な視点である。受け入れた学生の入学後の挙動を十分に調査し、入学に際してミスマッチングが起こっていないかを点検する必要がある。また、一般選抜において、志願者増を期待し安易に入試科目の負担減に流れることも慎まなければならない。これはやる気のある志願者の割合を減ずる (不本意入学者⁷を増加させる) ことに繋がる恐れがある。本稿では志願者数解析から本学が実施している入試が高校生から受け入れら

れているかどうかを探ろうとした。地元高校生の志願状況に注目して分析を行ったところ、地元の優秀な人材が本学への入学を希望している状況が確認できた。本学への進学を希望する志願者のボリュームゾーンは進学校と呼ばれる高校であり、そこで学んだ受験生に相応しい入試を検討してゆかなければならない。

参考文献とノート

- 1) 文部科学省「18 歳人口及び高等教育機関への入学者・進学率等の推移」
https://www.mext.go.jp/content/20201209-mxt_daigakuc02-100014554_2.pdf
- 2) 安田賢治「笑うに笑えない大学の惨状」祥伝社新書 (2013)
ISBN978-4-396-1139-1
- 3) 木村 誠「大学大倒産時代」朝日新聞出版社 (2017) ISBN978-4-02-273095-4
- 4) 岡山県立大学 令和 4 年度 (2022 年度) 入学者選抜要項
- 5) 岡山県立大学教学課入試班 “統計__出身校・試験区分・所属毎(2022)”
- 6) 各高校の公式 HP で公表されている進路実績を調査。令和 4 年度実績が未だ公表されない高校では過年度の数値を用いた。また進学実績を公表していない高校はグループ D とした。
- 7) 竹内正興、定金浩一 「現代の大学不本意入学者—入学と就学の観点からの検討— 甲南大学教育センター年報・研究報告書 (2019) pp 1-11

Inquiry into the Entrance Examination of Okayama Prefectural University Based on the Analysis in the Numbers of Applicants.

Kyosuke SATAKE*, Hitoshi KIMURA, Hideyuki YOKOTA, Hidetoshi HIRATA, Hideyuki ITO

*** Center for Admissions, Education and Research**

Abstract : Shrinking of the 18-year-old population, which has been considered as one of the current social issues in Japan, leads to decline of applicants for universities. Even under these conditions, the application-to-enrollment ratio should be maintained several times of enrollment capacity to perform an effective entrance examination. In order to ensure human resources for students, increasing in the number of applicants is essential. As recognition the present situation of Okayama Prefectural University, an analysis in the numbers of applicants in the year of 2022 is carried out to consider an appropriate entrance examination system. Besides, the correlation between applicants from Okayama prefecture and graduated high school level in general entrance examinations of each division are investigated.

Keywords : Okayama Prefectural University, General Entrance Examination, Special Entrance Examination, Reform of Entrance Examination, Numbers of Applicants